

ミディトマト

1. ミディトマトの魅力

4) 作付体系

凡例 : 定植 : 収穫

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作型	半促成作		_____		夏秋作		_____		抑制作		_____	

2. 栽培のポイント

- ・ハウス栽培を原則とする。
- ・水田で栽培する場合は、排水対策を徹底する。

3. 栽培の手順

< 半促成作 >

1) 圃場の準備

排水対策

- ・地下水位の影響を受けにくくするために、ハウスサイドから排水溝にかけて古ビニールなどを敷設し、雨水を速やかに排水させハウス内への侵入を防ぐ。

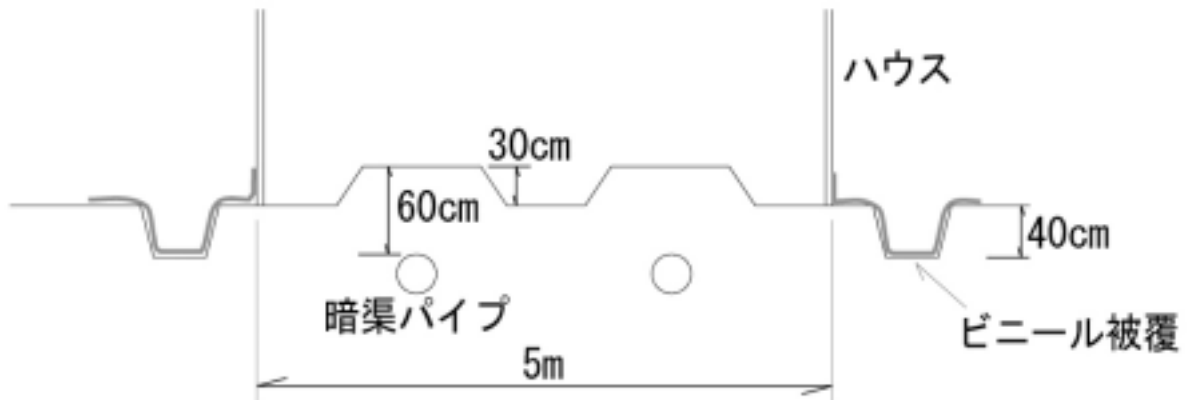


図1. ハウス内の排水対策の様子



写真1. ハウス外の排水対策の様子

施肥

半促成作の施肥例

(kg/10a)

- ・施肥量については表 1 参照。
- ・施肥量が多いと初期生育が旺盛になりやすいので、施肥前に必ず pH、EC を調査し加減する。

耕起・畝立て

- ・手で握って少し崩れるくらいの

土壌水分(土壌含水率 30～40%)のときに耕耘する。

- ・土壌水分をコントロールしやすくするために 30cm 程度の高畝とする(乾きすぎに注意)。

灌水チューブ・マルチの設置

- ・灌水チューブは、1 畝に 2 本設置する(事前に破損や詰まりがないか確認)。

- ・畝立て後、畝の芯まで行き渡るようたっぷりと灌水してから、定植の 1 週間前にはマルチおよびトンネルを設置し地温を高めておく(根の最適温度は 22℃、機能低下温度は 15℃)。

- ・マルチは、地温の確保しやすい透明マルチまたは緑色マルチを使用する。

2) 定植

栽植方法

- ・2 条植、畝幅 120cm、株間 40cm。1 株 2 本整枝とする(1,000 株/10a)。

定植方法

- ・定植前にたっぷりと灌水をする。また、本葉 5 枚以下に着いた花房は摘除する。

- ・接木部より上が土に接すると自根が発生して土壌病害が発生する可能性があるため、鉢土面が床土面と水平か、やや浅植えとする。

- ・暖かい日を選び、地温(15℃以上)を確認して定植する。

- ・ハウス内の気温が高い午後 3 時頃までに植え付けを終える。

- ・鉢土と圃場の土が密着するように、汲み置きした温かい水をヤカンなどで根鉢の周りに手灌水する(灌水チューブは使用しない)。



写真 2 . 定植後の様子

3) 栽培管理

ハウス内温度管理

- ・定植後直ちにトンネル被覆を行い、4 月下旬頃まではハウス内の気温を日中 22～28℃、夜間 10℃確保する。

- ・ハウス内の気温が確保される日は、トンネルを開放して換気と採光に努める。

- ・外気温が最低 10℃以上(5 月上旬頃)になれば、昼夜ともハウスのサイドを開放する。

灌水

- ・定植直後～活着までは、手灌水で根鉢の周りに少量灌水する。

- ・活着したら、灌水は控えめにして灌水チューブにより適宜行う。ただし、頻繁に灌水を行うと根群の発達が抑えられるので注意する。

ミディトマト

・灌水は午前 10 時までとし、一度に多量の灌水はしない。

整枝

- ・一番低い花房直下の強いわき芽を伸ばして、主枝 2 本仕立てとする。
- ・仕立てる主枝が決まったら、すみやかにわき芽かきを行う。
- ・わき芽は、晴天日の午前中に手で折り取るように除去し、夕方までに傷口が乾くようにする。

追肥

- ・4 段花房が開花し始めたら追肥を開始する。
- ・追肥が遅れると草勢の低下とともに、4 ~ 5 段花房以降の着果や肥大が悪くなりやすい。
- ・草勢が強い場合には、灌水だけとし、草勢を見ながら数日後に追肥を行う。

誘引

- ・直立仕立てを基本とするが、草丈が高くなった場合にはホルモン処理等の作業が行いやすいように斜め誘引する。

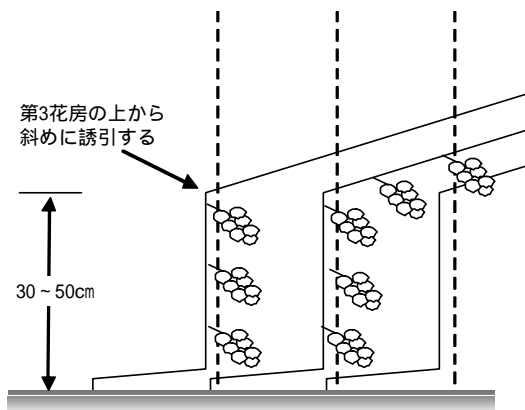


図2. 斜め誘引の様子

(誠文堂新光社刊「改訂トマト生理と栽培技術」より一部改筆)

交配

< マルハナバチ利用 >

- ・マルハナバチの導入前に、サイド、天窗などにマルハナバチが飛散しないよう予めネットや寒冷紗を張って置く必要がある。
- ・受精が十分行われるよう 13 ~ 30 (4 月下旬以降) で管理する。
- ・巣箱は風通しのよい温度変化が少ない場所 (ハウス入り口付近) に設置する。また、巣箱の向きは畝と同じ方向にし場所や向きはむやみにかえない。
- ・ハチの活動はバイトマークの有無で確認する。バイトマークがつき過ぎる場合は餌となる花粉が不足しているため乾燥花粉や菜の花などで花粉を補充する。
- ・マルハナバチの導入前に病害虫防除を徹底しておく。
- ・マルハナバチの活動が悪い場合や着果していないようであればホルモン処理を併用する。



写真3. バイトマークの様子

<トマトーン利用>

- ・1花房当たり3～5花開花したとき、ハンドスプレー等を用いて、芽や葉にかからないよう花房の後ろに手を添えて、花が濡れる程度にトマトーンを噴霧する。
- ・トマトーンの倍率は低温時(20℃以下)は50倍、高温時(20℃以上)は100倍とする。
- ・収穫終了時期を想定し、ホルモン処理から収穫までの日数を差し引いた日をホルモン処理の最終日とする(夏50～58日)。

摘心・摘果・摘葉

- ・収穫終了予定段となる花房の上2葉を残して摘心する。
- ・摘果は原則として行わなくてよい。ただし、1花房に10果以上着果している場合や形状の悪い果実は早めに摘果する。
- ・摘葉は原則として行わなくてよい。しかし、病害の発生が懸念される場合は収穫を終えた花房の下葉を摘除する。

尻腐果の防止

- ・土壌水分不足や地温上昇による根の衰弱は尻腐果の多発を招くので、梅雨明けと同時にマルチの上に敷わらをするなどして地温の上昇を抑える。また、適宜カルシウム資材を幼果に散布するとよい。

収穫

- ・受精後50～58日程度で収穫適期を迎える。
- ・果実全体が鮮紅色に着色したものを収穫する。なお、早朝の果実温度が低い時に行う。

<夏秋作、抑制作>

1) 圃場の準備

排水対策

- ・半促成作に準ずる。

施肥

- ・施肥量については表2参照。

耕起・畝立て

- ・半促成作に準ずる

灌水チューブ・マルチの設置

- ・半促成作に準ずるが、生育期間が高温となるため、マルチは有孔白黒ダブルマルチを用いる。

抑制作の施肥例

(kg/10a)

肥料名	基 肥	追 肥
完熟堆肥	2,000	追肥は4段花房開花期以降、各花房開花時に液肥特2号を12 $\frac{1}{2}$ リ施用する(250倍程度)
石灰質肥料	120	
ようりん	30	
有機ブリケット特S90	90	
基肥成分量	N:5.4	P:11.4 K:4.5

2) 定 植

栽植方法

- ・半促成作に準ずる。

定植方法

- ・半促成作に準ずる。ただし、定植時間は午後、気温が下がってから植える。
- ・定植後3～4日間は30℃を超えないよう管理する。

3) 圃場管理

ミディトマト

ハウス内温度管理

- ・梅雨明けから8月下旬頃までの高温期間は、熱気が停滞しやすいハウス肩部より上の換気を励行する(肩、天窓、つま窓を開放)。
- ・ハウス屋根上を遮光率 40%程度の資材を用いて、ハウス内温度の上昇を抑えるような工夫をする。
- ・遮光カーテンの場合は、午前10時～午後3時まで遮光する。



写真4. 遮光の様子

- ・低温期間となる10月下旬からはサイドを閉めて保温に努める。この時、果実の結露による裂果防止のため完全には密閉しない。
- ### 灌水

- ・半促成作に準ずるが、しおれは落花、着果不良の原因となるので注意する。

追肥、整枝、誘引

- ・半促成栽培に準ずる。

交配

- ・半促成作に準ずるが、高温期にはマルハナバチの利用は難しいためホルモン処理を行う。このとき、収穫終了時期を想定し、ホルモン処理から収穫までの日数を差し引いた日をホルモン処理の最終日とする(秋70～75日)

摘心・摘果・摘葉

- ・半促成作に準ずる。

尻腐果の防止

- ・土壌水分不足や地温上昇による根の衰弱は尻腐果の多発を招くので、高温時にはマルチの上に敷わらをするなどして地温の上昇を抑える。また、適宜カルシウム資材を幼果に散布するとよい。

収穫

- ・受精してから高温期間では42日程度、低温期間では60日程度で収穫適期を迎える。あとは半促成栽培に準ずる。

4. 病害虫防除

- ・地下部の病気については、根腐萎凋病、青枯病の発生が多いため、発生が予想される圃場では抵抗性台木による接ぎ木や土壌消毒で対応する。
- ・地上部の病気については、灰色かび病、疫病、うどんこ病、葉かび病の発生が多いため、予防防除を定期的に行うことが基本となる。また、ハウス内の過乾燥、多湿を防ぎ、被害葉を早めに摘除することも重要である。
- ・害虫については、期間を通してハモグリバエ、ハダニ、アザミウマ類、コナジラミ類が、夏秋、抑制作では特にオオタバコガやハスモンヨトウなどの発生が多いため、粘着板やフェロモントラップなどによる発生予察を行い、害虫の発生状況を把握し適期防除を心がける。また、ハウス周辺の除草やハウス周囲に防虫ネットを張りハウス内への害虫の侵入を防ぐ。